



目 次

各地教報.....	釋尊降誕の大因縁.....
	本多日生
	本多日生

第三十四年五月號



釋尊降誕の大因縁

大僧正 本 多 日 生

釋尊の御降誕會に因んで、お釋迦様が吾々人間の世の中にお生れ下さつた大因縁といふことを述べやうと思ふ。人生に於る一切の事柄は因縁和合して成就するので、因縁が離れた時には一切の事柄は成立たないのである。それ故に佛敎に於ては、一切の事柄を解釋するのに因縁といふ言葉を用ひるのであるが、因縁には小さなものと大きなものがある、「袖振り合ふも他生の縁」といふ諺もあるやうな譯で、同じ電車に乗合すのも因縁には相違ないがそれは小さな因縁である。親子となり夫婦となりするが如きは因縁の中に於てもよほど大きな方であらうが、併しそれ等も先づ一世一代によつて縁が片づいて了ふ譯である。それ故に深い考から觀察すれば、普通人生

に於て大きな因縁である、深い因縁であると考へてゐる事柄よりも、吾々が娑婆世界に生れて、お釋迦様が娑婆世界に御降誕されたといふ、この佛様と吾々との因縁の方がヨリ大きな、ヨリ深い因縁であるといふ事を悉く述べやうと思ふ。若し釋迦如來が人間の世の中にお生れなさなかつたならば、吾々にどういふ影響があるかといふことを本當に考へて見度いと思ふのである。

すべて因縁相合して物事が成立つてゆくのであるが、これを人間の心に就て考へて見たらどうであるか。人間の心もやはり因縁に依つて變るといふ原則を外れるものではない、惡縁これを導けば、どのやうな兇惡な性質でも現はして鬼に似たやうな人間も

出来るのである。それ故に人間に取つては、善き方の縁の而も強い大きな善縁を與へられることに依つて、初めて人間に生れて居ることが幸福であつたといふ事が言へるのである。

吾々人間は普通の生活から言へば、世間の普通の事柄を教へて呉れる親とか、先生とか先輩とかの指導に依つて、一般の知識を得、道徳、經濟の事を知つて先づ今日の文化の程に人間生活といふものをし居るのであるから、ちよつと考へればそれ等の事柄が丁度吾々卵を温めて呉れた親鶏に當るやうであるが、よく考へて見るとそれ等は極く皮相の事柄である、即ち吾々の肉體に關係してゐる事柄なのである。

世間の吾々に與へる幸福なるものは、肉體に關する事が大部分で、少しの精神的の事があつてもそれは一時的の解脱であつて、眞に人間の魂そのものを根抵より救ふ力は無い。それを救ふもの、これを宗

眞に解脱して、さうして人生苦の解脱の結果は、死して永遠の覺に進んで行くのである。生きて居る間はいつでも宜い」といふやうなものではない。本當に人生を解脱する所の秘訣は即ち佛の教へられる信仰にあるのである。そこに於てお釋迦様と吾々との關係は非常に御恩が深い、有難い因縁であるといふことが分るのである。人類の歴史には大勢のえらい人が出て吾々を導いて呉れ、吾々を守つて呉れて居るけれども、その文化啓蒙のすべての偉人の事業は今申す形以下に屬する事、若くは精神に就いての一時的の解脱に關する事で、眞に自己を救ふ所以でない、眞の解脱でないといふ事が分るのである。

であるからお釋迦様一人の事だけれども、此の一人が人類の間にお生れなさらなかつたならば、吾々は眞に教はるべき道は無いのである。誰か代つて間に合ふ者がありさうなものだと思ふ人もあらうけれども、それが無い、天に二日無きが如くである。お

教と名づける。人間が對人關係に於て善い事をする例へば親に孝行をするとか、女房を可愛がるとか、商賣に勉強するとか、世の中の爲に親切を盡すとかいふ事は善い事であるけれども、それは人と人との間に於ける道徳の問題であつて、己れ自身の永遠不滅の魂、眞の自己といふものが救はれるや否やといふ問題とは別なのである。人生に於ける幸福だとかさういふ道徳の實踐とかから現はれる有難さといふものは、有爲の幸福と佛敎では申すのである。「有爲の奥山けふ越えて」といふ、その山を超えないこちら側にあるものが、人生の普通に言ふ幸福であり有難さであつて、それは結局一時的の夢か幻のやうなものである。

お釋迦様は、その一切の人々が爲し得なかつた所の有爲の奥山を越えた永遠の生命に對して、本當にお救ひ下さるのである。併しそれは唯死んでから救ふといふのではない、生きて居る間から人生の苦を離すのである。それ故に、釋尊の御降誕が吾々人間と大きな因縁關係を有つといふことはよく分るのであるが、その意味を更に法華經に現はれて居る所に依つて正確に述べやうと思ふ。

譬諭品に於ては、譬諭に寄せて此の意味を明瞭にせられた。一切衆生は眞に惑れなものであつて人間の世の中は色々幸福のやうな事があるけれども、併し結局を考へると四苦八苦の巷である。表面に現はれる幸福といふものは眞に皮相的なものであつて實際は深刻な苦痛を以て包まれてゐる所の人生である。それは人各々結局は皆死んで行く、死んでゆくといふ事の爲には愛別離の苦、みといふものがあつて親子の別れ、夫婦の別れ、兄弟の別れ、親しい友達との別れといふやうな事は悲慘なものはない。一切

の楽しみはそれに依つて打消されて了ふのである。例へば碁を打つのが好きだ、淨瑠璃を語るのが好きだと言つた所が、自分の子供が自動車に轢かれて死んで横つて居るといふ事が眼の前にあつたならば、それを見て淨瑠璃を語ることも、碁を打つことも、酒を飲むことも出来たものではない。斯くして人生の幸福といふものは、愛別離の悲みの爲めには根柢より覆へざるべきものである。

そこで一般の生活は、色々の方法でそれをごまかして行くので、ごまかしの上手な者は平氣なやうな顔を装うて居る、或は酒を飲むとか、芝居を観に行くとかして、その嫌な嫌な精神を想ひ起さないやうにするのである。それはもうその事を考へ出したら堪らない、愛別離の悲といふものは、親子、兄弟夫婦、親戚、色々の關係で次から次へと起つて來るのであるから、まあ何とかごまかしてもしなければ到底堪へられないやうな嫌な感情に始終襲はれるの

である。

その他何事につけても人生はナカ／＼思ふやうにならぬ、眞に性悪く出来てゐるのである。求不得苦と言つて自分の求めるものか得られない金が欲しい／＼と思ふ者には金が得られない、金持になると今度は名譽が得たいといふやうな欲望に代つて、或は市會議員になつて見たいとか、或は代議士になりたいたいとかいふことを考へる。それが幾ら金を使つても成れさうでナカ／＼成れないといふやうな事で苦しむ。必らず人間は一種不可能なやうな事に欲望を持つてそこに苦を描くものである。その欲望を切斷すれば直ぐに精神の平和が保てるのだけれども、その人に取つては、それが思ひ切ることが出来ない。此の頃も華族の息子が或る娘と情死をしたといふやうな出来事があつた。それはその娘の身の上と同情をした結果であるとか新聞には傳へてあつた。同情したのは宜いけれども、一緒に死なねばならぬとい

ふ事はない、自分も學校を卒業して立派に働いて行ける身分なのだから親に相談してその娘を自分の妻にすることが出来れば妻にするとか、若しどうしても出来ぬといふならば、又他の方法を研究して見れば宜いのである。それを唯女の身の上と同情したからと言つて、自分も一緒にモルヒネを飲んで死ぬといふやうなことは、それ迄に至る當人の心の中といふものは非常な苦みと悶えに悩まされたに違ひない。之もやはり求めて得ざるの苦しみである、自分の欲することがいろいろ周囲の事柄の爲に許されない、それ故に煩悶して遂に死に向つたのであらう。さういふ苦痛といふものは、形はいろいろ違つて居るけれども、實は人生には數限りなく存在して居るのである。

釋迦如來は、どうかして一切衆生のさういふ深刻なる心の奥の苦を除いてやりたいものだとお考へになつた。彼等の生活状態は、恰度火事のいき居

る家の内に、子供が玩具に氣を取られて遊んで居るやうなものである、今に火が家中に廻つて焼き殺されて了ふ、玩具の喜びは一時であつて、焼き殺される苦みは深刻なものである、實に可哀相なものだ。一切衆生は悉く三界の火宅に於て心を春はれて火に焼かれんとして居るものである、到底尋常一様の事ではこれは救へない、遠い所から「火が燃えてゐるから氣を付けろ」と言つた位の事では到底眼を覺さない。その火宅の門まで来て「早くお前達は出な」と危ないぞ」と言つたけれども、それでも彼等は遊戯に夢中になつて居て出やうとしない。遂にその火宅に入つて玩具に氣を取られて居る子供等に對して警告を與へて「汝等速に出でよ、汝等の欲しがつて居る所の斯う／＼いふ良い玩具が門の外に在る速く出て來た者に之を與へるぞ」といふ事を以て彼等の心を導いて、終にすべての子供を門外に導き出して安全なる地に移された。斯ういふ譬諭を以て説

かれて居る。

この「火宅に入つて救ひ給ふ」といふことが釋尊の説法教化なのである。之が若し他の世界に居つて遠くから聲をかけるばかりで、身を現じて法を説くといふ事がなかつたならば、この人生の物質的享樂に心を奪はれて居る一切衆生は、救はれることは出来ないのである。この點が譬諭品に於て最も明瞭に現はれてゐる。その代りに佛が茲に現はれて來た以上は、我の力は餘りある、何としてでも一切衆生を救ふことが出来る、「我身に力有り」で、いよ／＼マゴ／＼する者は、トツ提へて火宅の門の外へ抛り出すことも出来る、けれどもサウしないでも行ける。自分の有つて居る品物の或る物を與へると言つても子供は出て來るけれども、先づ平生彼等の求めて居る羊の車、鹿の車、小牛の車を以て誘導するの丁度宜しからうとお考へになつて、それから汝等の求むるもの皆悉く門外に在りと言つて、殘らず

火宅より救ひ出された、一人の火宅の内に残つて燒け死んだ者はなかつた。さうしてそれ等の子供を皆安全の地に移して、眞の幸福を與へたやうに、佛は一切衆生に世間の樂、涅槃の樂といふものを俱に與へられた次第である。

信解品に至つては、更に釋尊出現の關係といふものは明瞭なことであつて、彼の長者の息子が迷ひ出て流浪して乞食になつて居る、父の長者はそれを捜し索めて、大勢の人間の寄つて來るやうな處に家を構へて、若しや子供が歸つて來る事もあるかと待つて居つた子供の方も巡り廻つて遂に其處にやつて來て、父に出會ふことが出來た。その父と子が相會つて茲に初めて濟度といふものが起るのである。子供は故郷へ歸つて來たけれども父は在さないとか、父は待つて居られるけれども子供が歸つて來ないとかいふ風に、父子相離れるならばそれはどうしても救はれなかつたものである。釋尊が娑婆世界に出現

し給ふて、一切衆生の渴仰の心と、釋尊の慈悲の御心とが結んで以て斯くの如く佛法といふものが起つたのである。今日でも一切衆生に破佛の思想盛んにして、佛法はありと雖も之を信仰しない、又佛法自らも之を宣傳しない、經卷は高く棚の上に束ねて之を宣説しない、人々も亦佛法を求めないといふことになれば、如何に澤山のお寺があつても、澤山のお經があつても、僧侶法を説かず、檀家法を聞かず形は佛法として遣つて居ても、それ等の人は終に佛に遠ざかり、永久に救はれないことになつて了ふのである。その兩者の相接するところ、今や佛は涅槃し給ふたけれども、その佛の御教が經卷となつて傳はり、是を宣傳する所の僧侶があり、是を悦び聽く所の渴仰の衆生あつて、そこに佛法といふものは活きて働いて行くのである。その因縁が熟さなかつたならば、佛法ありと雖も何の役をも成さない。檀家法を求むれども僧侶之を説かず、僧侶法を説けど

も檀家耳を掩うて聽かずといふことになれば、永久に佛法といふものは決して復活するものではない。之を釋尊の當時に戻せば、釋尊の出現その事が一番大事なのである。四月八日嵐毗尼園の花咲き匂ふ程に降誕しまして、一指天を指し一指地を指して「天上天下唯我獨尊、我は汝等を教はんが爲に此の世に出でたり」と仰せられたるその御佛を渴仰し、その佛の教を慕うて如何なる意味ぞと究め、是を身に行ふ、そこに佛教といふものが成立ち、人々が救はれて行くのである。

その意味が信解品に依れば、父なる長者は子供のやつて來さうな處に家を設けて待ち受けて居られる子供も巡り廻つて丁度その父の家に近づいたといふ關係になつて、父子相抱いて初めて茲に佛法の救濟といふものの因縁が起つて來るのである。釋迦如來を渴仰する心なく、釋迦如來の御教を聽かうといふ求法の心なくして、その人が救はれるといふことは

昔も今も決してあり得るものではない。

次の藥草論品に於ては、一層明瞭に、枯れなんとする草が雨に遇うて救はれた譬論を擧げられて、その雨が降るには大空に雲が出て来なければならぬ。雲の現はれて来るのが恰度釋迦如來が此の世に生れ給ふた事である。雨の降るのが釋迦如來が法を説き給ふた事であると。出現を大雲に譬へ、説法を雨に譬へて、一切衆生は枯れんとする草の如きものであるが、この如來の御教を受けて各々救はれたといふ事を親切にお説になつた。さうしてその説かれて行く意味合ひが洵に立派に整うて居るのである。恰度雨が降つて大きな木も、小さな草も皆澤を受け成長するが如くに佛が世に出られたのはその通りのものである。非常に大きな雲が空一杯に擴がつて徧く一切を覆うて、さうして夕立雨の様な部分的のものでなく、三千大千世界に一時に等しく大雨を洩いて所潤を與へるが如くに、如來は世に出で給ふて

徧く一切の衆生の爲に「諸法の實を分別し演説す」

此の天地宇宙の眞實の相を説き聽かして衆生を濟度せられる。それ故に佛は藥草論品に斯の如く仰せられた。

「佛も亦是の如し、世に出現すること、譬へば大雲の普く一切を覆ふが如し……一切の枯槁の衆生を充潤して皆苦を離れ、安穩の樂、世間の樂及び涅槃の樂を得せしむ。」

この佛の濟度の意味が非常に大事な事であつて、佛法は唯死んでから後だけの利益ではない。又此の世だけの小さな諦めを與へるやうなものではないのであつて、如何なる者も「安穩の樂」と言つて、人生の、前に言ふ種々の惱、愛別離の苦、求めて得ざるの苦、その他人生を襲ふ所のあらゆる苦惱を解脫し、安穩平和の生活に入り、「世間の樂」といつて世間の幸福も得られるやうに、又「涅槃の樂」といつて永遠の幸福も得られるやうに、我は衆生を導いて

行くのである。斯くの如くにして、要するに

「衆生を安穩ならしめんが故に世に現す」

この目的を以て世に出て來たのである。さうしてその法は一味解脫の法であつて、前に申す通り本當の信仰に徹すれば、如何なる人間でも人生の苦を解脫し、人生の罪惡を解脫し、まことに幸福なる人生を送つて、さうして永遠にも榮えゆく所の人間となることが出来るのである。

その大きな親切をば誰彼の差別なく、甲には厚く乙には薄くといふやうな偏頗な心は少しも持たない恰度たつた一人しかない子供を親が可愛がるやうな考へを以て、一切衆生に平等に、唯一人を愛するの心を以て向つて居るのが如來の慈悲心である。この佛語の如きも實に感激の多い語である。

「恒に一切の爲に平等に法を説く、一人の爲にす

るが如く衆多にも亦然なり」
一人兒を愛する心を以て一切衆生を殘らずその通り

に愛するを仰せられて居るのである。さうしてそれはナカ／＼世話の焼ける事であるけれども、立つたり坐つたり、去つたり來つたりして、大勢の者を濟度する爲にはイロ／＼と法を説かなければならないが、終に如來は疲れて厭になつたといふことはない。左様にして賢い者も愚かな者も、正しき者も邪なる者も、あらゆる者一切を救つたのである。

「正見邪見、利根鈍根に等しく法雨を雨して而も懈倦無し。」

これは實に佛敎の尊い所であつて、唯正しき者だけ相手にして邪見の者は振捨てるとか、利根い者だけ救つて鈍根な者は顧みぬとかいふのではない、正しき人も悪しき人も、賢き者も愚かな者もみな等しく一人残らず救ふて濟度の目的を達したものであると説かれた。

新様にして藥草論品に於ても、洵によく釋迦出現の因縁が説かれて居るのである。

更に化城論品に於ては、大通智勝佛の名に托しては、あるが、佛が世に出現になる光景に關して非常に詳しく説かれてゐる。梵天が光を見ては來つて讚歎する、佛が人生に出入られた歡喜は斯ういふものであるといふことを、繰返し、東南西北四維上下の十方の梵天が殘らず來つて讚佛偈を呈して居る中に、釋迦如來が今度娑婆世界へ御出現になつた出現の因縁といふことが、自ら分る譯である。その讚佛偈の一節を御紹介する、

「衆生は常に苦しみ悩んで盲冥にして導師無し、苦盡の道を識らず、解脱を求むることを知らずして、長夜に惡趣を増し、諸の天衆を滅損す、冥きより冥きに入りて永く佛の名を聞かず」佛が世に出入れなかつたならば、多くの處生は常に苦みと悩みに陥つて、恰も盲者が手引を失つてマゴついて居るやうな恐ろしい状態のものである。どうしたらその苦みが除き得られるかといふ事も識らず、

を以て見る太陽の光はあるけれども、精神界は暗黒である、人間の世の中その儘が地獄、餓鬼、畜生のやうな三惡道の状態になつて行く、地獄は瞋恚の苦、餓鬼は飢渴の苦、畜生は愚癡の苦であるから、人間の心に腹立つやうな気分や、或は求めて得ざる苦や、筋道の立たない煩悶や、斯ういふものが殖えて來る、尙ほ阿修羅も亦盛んなりて、鬭争の心がその上に燃え立つて來る。左様にして世の中にだん／＼善い事の方は減つて來て、罪の業が多くなるから、その結果は樂み及び樂みの想が無くなる、それ故にナニも苦しまなくても宜いのにイラ／＼して、自ら事無き時その心は却つて畏怖と苦悶に悩まされる、所謂神經衰弱者が殖えて來る。斯かる處に佛世に出で給ふて、是等の苦惱を除き、佛は世間の眼と爲りて諸の衆生を哀愍し給ふ。それ故に佛が出現すれば三惡道は衰へて、佛の心が世の中に盛んになつて來る譯である。隨つて罪惡は滅び、樂み及び

眞の解脱は何處に求むべきかといふ事も知らず、長き／＼問ます／＼惡道に墮ちて、永久に佛の名をも聞くことは出來ない。今や大通智勝佛が世に出で給ふて、衆生はその反對に惱を離れ、盲者が立派な導師を得、苦をのがるべき道をさとりかくして次第に明るみに向つて終に眞の解脱に達するのであるといふことを、立派に偈を説いて讚歎して居る。釋迦如來の出現亦これと全く同じ利益を衆生に與へるのである。又

「世尊未だ出で給はざりし時は、十方常に闇冥にして、三惡道增長し阿修羅も亦盛んなり、諸天衆轉た滅じて死して多く惡道に墮つ、佛に従つて法を聞かず、常に不善の事を行じ、色力及び智慧、斯等皆減少す、罪業の因縁の故に樂及び樂の想を失ひ邪見の法に住して善の儀則を識らず。」佛が世に出入られなければ世の中は闇冥同然で、肉眼

樂みの想は増して、何とはなしに唯坐つて煙草を吸うて居る無念の間にも心がゆつたりして、法悦の心が溢れるといふことになるのである。これ皆佛の世に出で給ふた因縁の致す所であるといふことを、十方の梵天が繰返し／＼讚歎して居る。化城論品に現はれた是等の澤山の讚佛偈といふものは、採つて以てその儘釋尊の出現を讚歎する語と見て宜い譯である。それから進んで、壽量品に就て考へて見れば、子供が毒に中てられて悶え苦しんでゐる、そこに父なる良醫が歸つて來てこの有様を見て感れにお考へになつて、良薬を與へてこれを癒して下さるといふ譬喩を以て説かれて居る。父歸りまされなければ子は永久に毒に中てられて、地に宛轉しなければならぬ。父歸りまして此の子に薬をお與へ下されるのである。その父の歸りませることが、即ち釋尊が娑婆世界に御降誕下された事柄である。

妙音品に至れば、東の世界の妙音菩薩が娑婆世界へ往詣なさるに方つて、その御師匠様である佛様が妙音菩薩に誡められて居る事がある。娑婆世界は土石のゴロゴロして居る穢悪い世界である、そこに法を説かれる釋迦如來は小さな身の佛である、お前は非常に立派な相をしてゐる、それ故にお前が娑婆世界へ行つて見て、その世界の穢い事や、佛様の小さい事に就いてこれを輕しめるやうな事があつてはならぬ。汝彼の國を輕ろしめて下劣の想を生ずる事莫れ。何故かと言へば、さういふ穢惡充滿の世界に釋迦如來が身を應じて御出現なさつて、衆生を濟度なされて居るといふ事は、この美しい淨土に居て法を説いて居て自分の如き佛とは價值が違ふのである。釋迦牟尼佛が娑婆世界の、罪業ふかき教化しにくき人々の前に立つて法をお説きなさるほど、これが眞の佛の尊とさ申すものである。それ故に皮相の觀を以て、唯表面の土石の世界であるの、佛の身

が小さいのといふやうな事を以て、娑婆世界に行つて輕蔑の想を懐いたならば大間違ひである。現在の相は左様にあらうとも、釋迦如來が娑婆世界に出現なさつて居るその御心勢に對して、深く感謝感激の心を持たなければならぬのであるといふ事を、吳々も妙音菩薩に言つて居るのである。

この意味は、是れ亦釋尊の人生出現のことに就いては非常に關係のあることで、妙音品一ヶ所だけに説いてあるのではない。悲華經の如きは十卷に涉つて全文この意味を徹底的に説明せられたのである。即ち安養淨土を選んで住つた無淨念王(阿彌陀佛)よりは、實海梵志(釋迦如來)が娑婆世界を選んで五百の大願を立てた方が遙かに、慈悲がすぐれて居る、彼を普通の華としたならば、實海梵志の娑婆出現の慈悲に勝れて居ることは、一切の華の中の王様であるところの大悲芬陀利華の如きものであると言つて、釋迦如來の娑婆世界出現を以て華の中の華

慈悲の中の大慈悲であるといふことを徹底的に説きになつたものが悲華經である。その悲華經の精神は、妙音品に於て娑婆世界を輕しめるなど言はれたのと同じ意味である。

娑婆世界より他に美しい世界を説いて、此の娑婆世界を唯だ厭嫌らせ、隨つてそこに現はれた佛もつまらないもののやうに説くといふことは、佛法の中では出来損ひの思想である。他の方に非常に美しい世界があつて、そこに偉い佛が居る。今この世界は穢い穢土である、此土に現はれた佛は駄目だといふやうなことを言ふのは、非常に判斷を間違つて居るのである、難化の衆生と申して、教化のし難い、煩惱五濁の中に出現なされる佛が一番偉いのぢやないふことは、宗教のはたらきの論理からして明瞭な事であるあゝも、説ける斯うも説けるといふやうな事のあるべきではない。例へば僧侶が人々を教化するにしても少しも惡氣のない、人格の惡摺れして居な

い人達が一室に集つて居る、そこへ行つて唯簡單な話をするのと、根性の拗けた罪の深い人々の集つて居る社會に入つて、巷に立つて之を教化するのと、どちらが尊い事であるか、それはどちらも尊いと言へるでせう。などと言ふのは實におどろきの議論であつて、唯爲し易き方を選んだのは宗教としては尊きものではない。困難なる方を選んで、而も喜んでそれを爲す所に尊い功德がある。悲華經を見ても、他の菩薩達が皆樂を望んで、心配のない所、教化のし易い處……と言ふので實海梵志が胸くそが惡いと言つてゐるのは、實は痛快な言ひ現はし方である。世尊よ、譯も彼も唯自分の樂なやうな事はかり望んで誓願を立て、モウ聞いて居れません、私はそれ等の人達が排斥して「こんな者は俺の手では救ふことは出来ぬ」といつて、十方の菩薩が放逐したる罪惡深重の衆生の集まれる娑婆世界に行つて衆生を濟度致しますと彼は言つた。それを考へるといふと、

念 告

釋迦如來がこの娑婆世界の五濁惡世に出て、吾等衆生を濟度して下さるといふ因縁に對しては、更に深き感激感謝を持たなければならぬと思ふのである。

今日吾々人類は文化が進んだとは言つて居るが、人々の根性の働きの工合を見ると、大した進歩はない昔も今も善い人は心が善く働かし、悪い人はやはり悪く働いて居るのであつて、一向變化はないと思ふ。どうかお互によく注意して、自分みづからも心を改め、又佛様に依つて救はれる方に近づき、即ち自らも覺め、佛の救濟を求めて、さうして自他協力の上に眞の解脱を求めて、永遠の幸福に就くやうに努めたいものであります。(完)

x x x x x

思想は滔々として唯物に傾き、無佛敎運動が炎々として迫る。最早や吾人は此上一日も晏如たるを許されぬ。

日蓮門下の生命は實に知法思國にある、今こそ奮然として蹶起すべき時であるまいか。皇國の爲めに須らく身を捨てよ！ 御法の爲めに宜しく命を捧げよ！

知法思國會は日宗各派及び在俗合同し其宣言綱領發表式及び大講演會を左の通り開催す、各位奮つて我等が淨願に力を添へられよ。

日時 五月十七日夜間
場所 有樂町 朝日講堂
講師 本多日生 佐藤鐵太郎 柴田一能
小林一郎 三吉顯隆 井上一次 (順不同)

主催 知法思國會

信仰の變遷に就て

大僧正 本多日生

信仰はその性質に就て言へば、一旦定まつては動かないもので、何物にも打壊られない性質を有つものでありますけれども、併ながら一旦それが一番善いと思つても、より以上の善きものに出會へば、やはりその信仰は打破されるのである。さうしてその事は悪い事ではないので、信仰の内容に關係なくして、たゞ外部からこれを論ずれば、一旦定まつた信仰は永遠に動搖をしないものであるけれども、併し意義ある信仰は、信仰に内容が伴うて居る、その内容を比較して、さうして今迄のものが劣つて居る、足らざる所があるといふことが明瞭になれば、より勝つた、より完全なる信仰に昇り行くといふことは免がれ得ない事でもあり、又さうあるべき事である

と思ふ。同じ信仰を堅固に考へるにしても、淨土門の信仰或は基督教にしても舊敎の信仰といふものは、吾々の考から見ても頑迷不靈にして、一旦定めた以上は善くとも悪くともそれで押し切れ、斯ういふやうな意味に説かれて居るやうに思ふけれども、それは良くない事と思ふのである。親鸞上人の語だとして傳へられて居る所に依ると、縱し淨土門の敎が間違つて居つて地獄に行かうとも、それは仕方がない、欺されて地獄に行つてもそれは構はぬ、斯ういふやうな意味の言葉を擧げて、それが大變信仰の強い、正しい意味のやうに言うて居る。併しそれはちよつと女の人が不貞腐つたやうな時分に、「どうなつても

構ひませぬ、殺して下さい」といふやうなことを言ふが、一方から見るとそれも大いに強いやうであり尤ものやうであるけれども、併しそれは自棄氣味で言ふことではなからうかと思ふ。

日蓮聖人の言ひ現はし方は「智者に我が義破られずば用ひじとなり、そのほかの大難風の前の塵なるべし」と言われた。頸の座に据ゑられるといふやうな事では、自分の信仰は動搖を受けないけれども、智者あつて我が義を破るといふことで、信仰の内容實質がより善き、より尊きものがあることを指摘せられれば、自分はその信仰に還り行くといふことを日蓮聖人は言つて居る。そのほかの大難は風の前の塵である、さういふ壓迫であるとか迫害に依つて信仰を動かすことはないけれども、信仰そのもの、實質に於てより勝るものに出會つたならば、還り變るといふことを言はれて居る。この日蓮聖人の行き方が、本當の心得であると思ふ。たゞ意地張つて強い

といふことは面白くないことである、グラツク事は無論いかぬけれども、たゞ頑迷にして強いといふやうなことも、甚だ面白くないことで、そこに縛々として餘裕のある、正しきものには還り行くといふ寛大な態度、而かも智者あつて我が義を破るならば従ふと言ひながら、この自分の信念を打破るだけの智者は天地の間に又どはあるまいといふ自信力のある意味に於て信念を維持することが、頗る愉快なことであると思ふのであります。

釋尊の教化の御趣意もやはりさういふ風になつて居る。阿含あたりの諸經を見ますと、婆羅門の徒輩は頑迷不靈にして、一旦定められた御師匠さまの教は善くとも悪くとも守つて行く、師匠に欺されて地獄に行くのは何も後悔することはない、師匠を信じて行くのだから……といふやうな風で、非常に師匠を重んずる美點はあるけれども、それが甚だ頑迷な意味を有つて居る。釋尊はそのことを指摘して、教

はさういふものではない、どこまでもその信念の内容を明かにして、善きものには還り行かなければならないといふことを、盛んにお説きになつて居るのである。さうして釋尊御自身の教の方にも、淺い教から深い教、部分的の觀念から完全なる思想へどんどん導いて、小乗、權大乘、實大乘、遂には法華經本門の極意に於て信念を決定せしめた。善きより深きに進み行く所謂昇進といふことは、善き事として獎勵されて居るのであります。

然し一旦高き善きものに昇つた者が、或る誤解よりして再び低い方へ、劣つた方へと逆戻りするといふことは、最も恐ろしい事に説かれて居るのである。それは「退大取小」といふ語があつて、大を退いて小を取る、大といふのは大乘であつて、勝れた教であるが、それを退轉して小乗の低い教の方へと落込んで行くといふことは、その一つ落込むといふ事が、永遠にその人の墮落を意味するものであると

つて、この點を非常に戒められて居る。

日蓮聖人の「兄弟鈔」には、一番恐ろしい事は善き教から退歩することである、假令親を殺しても、どのやうな罪惡を犯しても、吾々が三千塵點劫、五百塵點劫といふやうな永い／＼年數を流轉すべきものではない、さういふ罪惡は或る年限を經過すれば消滅してしまふが、この始も無き已前より吾等が流轉を辿るといふやうな、その永き流轉の一番大きな原因は、一たび最も善き信仰に入り、最も尊き信念を與へられた、その尊き珠を捨てた罪に依つて永き流轉を辿るのである。何故に三千塵點劫五百塵點劫などといふ測られないやうな永き年代を惡道流轉の裡に彷徨ひ來るかといへば、謗法の罪といつて、正しき教を一旦握つて居りながら、或る事情からその教の惡口を言つたり、自分の勝手に信者同志つまらぬ喧嘩などをして、その飛沫を教の方へ持つて行つたり、坊主と喧嘩をして坊主の惡口のために教を傷

つげたりするやうな事のために、最大無上の正法を
 興へられたるものを抛つた、その罪は實に恐ろしい
 ことである。罪といふものはその對手に依つて重い
 軽いが出来るのであつて、恰も拳を以て綿を叩けば
 傷は付かないが、同じ力を以て叩いても、岩を叩け
 ば手が破れて血が出るやうなもので、悪人を殺せば
 その罪軽く、聖人を殺せばその罪重し、物を抛つと
 いても、一切衆生を救ふ力があり、一切の佛様の
 魂になつて居るやうな無上最大の正法を得て、而
 かもこれを抛つといふことは、その事は何でもない
 やうだけれども、それが非常な罪となつて、永き流
 轉を辿るものであるといふことを、懇々と「兄弟鈔」
 の中に戒められて居る。即ち罪の輕重は所對による
 といふ言葉があつて、今言ふやうに、同じ拳の力で
 も石を打つのと綿を打つのは、同じ力でありなが
 ら手に來る應が違ふといふこの日蓮聖人の一言は、
 私共は若い頃から願裡に響いて今尚ほ忘れない金

言である。
 詰らない事で信者同志喧嘩などをして「あんな奴
 の家に行くものか」と言ふ、その喧嘩は悪いことだ
 けれども、その位の事なら、二遍か三遍脈にでも生
 れたら、又人間の世界へ出て來られるものが、それ
 と一緒に善き信仰を捨てしまふ、「おのれあんな奴
 が信心して居るやうな信心をするものか、こんな珠
 數は斷つてしまへ」といふやうな詰らない事から正
 法を抛つてしまふ。さうするとそれが爲めに限りな
 き流轉を辿るやうな罪を作るといふことがあるので
 ある。

だから善きものを捨てるといふことは無論戒しむ
 べきことだけれども、淺き信仰より深き信仰に至り
 劣れるものより勝れたる所に進むといふことは――
 信仰の外部からいへば一旦定めたら動かぬものだけ
 れども、内容實質から検討すればその事は尊き意味
 であるといふことは、釋尊なり日蓮聖人なり皆同じ

御趣意のものである。

そこで話を續ければ長くなるけれども、法華經だ
 けに就て考へて見ても、法華經は我國に最初から弘
 まりもし、又それだけの尊さを示されて居つたので
 一切經が我國に渡り來るや、聖徳太子の手に依つて
 法華經は一切經の頂上に置くべきものであるといふ
 ことになり、菅原道真卿の如き方でも、熱心に法華
 經を信奉せられた。そこへ傳教大師が出て南都六宗
 を説破して佛敎を統一し、桓武天皇の御歸依を得て
 比叡山が出來、だん／＼と法華經の聲價が揚つて、
 宮中の佛事は法華八講といつて、一切が法華經中心
 になつて來た。それは何も日蓮聖人の力を待たない
 でも、法華經の聲價がそれ程に揚つて居つたのに、
 どうして日蓮聖人の手に依らなければ眞の法華經が
 弘まらなにか、日蓮聖人の御法難は殊に辱けないと
 いつて、傳教大師よりも、或は菅原道真よりも、日
 蓮聖人の法勳を吾々が感激するのは何處に在るか。

たい法華經が有難いといふことなら、日蓮聖人に依
 らなくても、誰でも宜いことになる。寧ろ今日のド
 ンドコ法華、雜炊法華といふやうなものに比べたな
 らば、それ以上の行き方が澤山あつた譯である。法
 華經に依つて帝釋さまを拜むとか、鬼子母神さまを
 拜むとか、あんなことをやる位ならば、モット／＼
 氣の利いたやり方がある、あんな間違つた事は昔は
 誰もやつて居ない。法華經に依つて分裂したといつ
 ても、それは普門品を讀んで觀音さまを有難がつた
 り、勸發品を讀んで普賢菩薩を有難がつたり、提婆
 品を讀んで女人或佛ちやといつて、佛様の力も忘れ
 毒量品の教理も忘れて、たゞ提婆品の一經で女人の
 成佛したやうに思つて、その事を書いてある文句の
 所に引かゝつて、女人が成佛したと書いてあるその
 文句だけを繰返して讀んで居れば女はそれで澤山だ
 ……といふやうな間違はあつたけれども、今のやう
 に帝釋さまだとか鬼子母神さまだとか、そんなこと

を言つて騒いだ者は昔はなかつたのである。それはちよつと佛教を研究したならば、帝釋なんといふものは婆羅門の神である、鬼子母神なんといふのも婆羅門の鬼である、そんなものを佛教徒が信すべきものではない。鬼を信じたり、人の子を取つて食ふ鬼婆を拜んだり、そんな事は誰が考へても、今日以後奇くも教育ある者が眞面目にやり得る事ではない。この頃も人の子を貰つては殺して錢だけ取るといふ貫子殺しの婆さんといふ記事が時々新聞に出て来る、或は三十圓とか五十圓とか金を附けて赤ン坊を貰つて来ては殺してしまふ、この鬼婆みたやうな者を、「偉い婆さんだ、感心な婆さんだ」と言つて拜みに行く奴があるか。それよりも非道いものである、鬼子母神といふのはたゞ殺すだけではない、頭から嘔つてしまふといふのである。そんな恐ろしい鬼婆を、信仰の對手にして拜むといふ法はない。鬼子母神といふものは法師擁護の誓は立てたけれ

ども、ナニも信仰の中心に置くべきものではないのである。さうして陀羅尼品を讀んで見ても、彼は人間の病氣を治すなどといふことは一つも言つて居ない。今までは悪い事を澤山して来たから、せめては自分の罪滅ぼしのために、法華經を弘める法師に反抗する者があつたならば、私はさういふ者を酷い目に遭はして法師を護ります、法師を惱ますこと莫れといふ願を立て、今まで人の子を取つて食つたやうな罪は、この法華經宣傳の法師を守護することに依つて罪を許して貰ひたいといふことを誓つたのであつて、その點はちよつと感心な婆さんである。けれども今のやうに狐が憑いて居るとか狸が憑いて居るとか言つて、「鬼子母神さま何とかして下さい」と言つて拜んでも、そんな力は無い筈である、説教をする坊さんを保護するといふのである。そんな事はちよつとお經を讀んで見たら直ぐにわかる。それをお經の意味合を少しも考へないで騒ぎ廻るといふのは

日蓮聖人の出現せられた意味合を没却する事の頗る大きなものである、まるで話にならぬ。而かも日蓮聖人の法統を酌む人々の中からさういふ事をやつて居る。他の方から悪口の爲めにそんな事をいふならば仕方ないけれども、法華經を讀み題目を唱へる者がさういふ事をやつて居る。東京で法華の信者と稱する者を百人寄せたならば、その中の九十八人まではそんな事をやつて居るだらう。大阪へ行つてもさうである、「俺は法華ぢや」「法華は何だ」「妙見さまぢや」と直ぐ言ふ。東京であつたら「堀の内のお祖師さまぢや」とか、「日限のお祖師さまぢや」とか、「中山の鬼子母神さまぢや」とか言つて居る。さういふ事は日蓮聖人の命を懸けて法華經を宣傳された意味合を全然考へない徒輩である。たゞ譯も判らずに法華經が一番宜しいといふやうな漠然たる事で、日蓮聖人は一代の間法難迫害と戦はれたものではない。

法華經の有難いことは一通り日本人に判つて居るけれども、その法華經の眞精神を發揮し得ない。圓智坊といふ人は一字三禮の法華經を書寫し、日に二部づつ法華經を讀誦したけれども、彼は法華經の精神を知らざるが故に、法華經を讀みながら、法華經を書きながら彼は地獄に行くことまで日蓮聖人は絶叫せられた、その事は遺文の中に歴然として今日遺つて居るではないか。假令手に法華經を握ると雖も、法華經の精神に合はなければ駄目である。それは教はさうあるべきものである、「孝經を以て親の頭を打つ」と日蓮聖人は言はれて居る、親に孝行せよといふことの書いてある書物を懐に持つて居る、人さへ見れば「私は常に孝經を見聞離さず持つて居ります」と言ふ、如何にも親孝行な感心な男のやうであるが、家に歸るとそれで親の頭をボン／＼叩く……それでは何にもならぬではないか。法華經々々々と言つた所が、今のドンドコ法華、雜炊法華がやつて

居るやうな事はいかぬと書いてある、いかぬと書いてあるものを讀みながら、さういふ間違つた事をして居るのぢや。

何處にそれがいかぬと書いてあるかといつたならば、法華經の信仰は釋尊を中心にして、その釋尊に絶對の活動力と、絶對の救済力とを認めて、他の佛が働いて居つても、それは天の一月から影を萬水に映すが如きものである、天月の本に歸つて本佛釋尊の絶對の力を信解することが法華經の信念であるそれを明かにしなければ、普門品を讀んで觀音さまに行くとか、陀羅尼品を讀んで鬼子母神に行くとかいふやうな法華經の信仰は役に立たぬといふことの爲めに、日蓮聖人は奮闘せられたのである。そんな法華經ならば幾ら讀んでも、幾ら書いても何にもならぬ。一字三禮といつて、お經を書き寫すのに、一字書いては三遍立つて拜む、又一字書いては三遍拜むといふやうにして法華經を書き寫すとしても、そ

それは日蓮門下に於ける大改革として現はれて來なければならぬ、日蓮門下を清めず、又法華經の教を明かにせずして、唯々「お茶を濁してその日」の飯を食つて通れば宜いといふ、さういふ魔つた坊主が多いから何時までも夜が明けないのである。何が爲に日蓮門下の僧となり、何の爲に法華經宣傳の任務を帯びて居るかといふことを考へたならば、そんな間違つた嘘のことを以て甘んじ得べきものではない。気分が悪くて生きて居れるものではない。宗教の信念をごまかして人間は生きることは出來ない、他の事には人間といふものはサウ完全には行かぬから、朝寝をして居つた言譯の爲に「少し頭が痛かつたものですから……」といふ位の嘘は言ふかも知れんけれども、自分の眞心を捧げる法華經の信解そのものを偽つて、そんな馬鹿な事の出來る譯のものではない。だからそんな藝當の出來るやうな坊さんや信者といふものは、世間の泥棒よりもモツ

の者は必ず地獄に行く時まで斷言したのである。嘘と思ふならばあの坊主の死に態を見て居れとまで日蓮聖人は言はれた。果せる哉、圓智坊が死ぬ時には非常な熱病に罹つて、黒焦になつて死んだと書いてある、丁度今日の黒死病のやうな病氣であつたかも知れぬ。随分極端に日蓮聖人は、理窟で判らぬ者の爲めには、彼れ圓智坊を見て居れ、必ずやあのやうに法華經を禮拜し讀誦しても、法華經の精神を忘れてたゞ經典崇拜ならば、それは墮獄疑ひなしと絶叫せられたのである。

然るに今の法華信者が、やはり經典崇拜で内容に入らない、たゞ譯もなく法華經が有難いと言つて、朝から晩までドンドコ、ジャブ、やつて居る。法華經の精神を意識せずしての信仰は、日蓮聖人の命がけて奮闘せられたその法勳を没却するものであるといふことを、法華を奉ずる者は深く反省しなければならぬ。

と人格の悪い者だと考へなければならぬ。泥棒の方がまだ正直である、他の事では生活が出來ないから泥棒をする、「お前、善いことをして居ると思ふか」「イ、エ、泥棒が善いとは思ひませぬけれども、ツイ食へないものですから……」まだ正直な所がある坊さんの方は悪いことをして居りながらそれが本當だと言つて居る。「一本多師がやかましく迷信攻撃などをやるのはあれは氣の狭い」ナンと言つて、ごまかしを以て何十年吾輩の正義の主張に反對をして居るではないか。法華經の内容の信解を明かにせずして單に外部より法華經を崇拜するといふことは、日蓮聖人の偉勳を没却するものである。

日蓮聖人は自分が宗旨を開かれてからすらも、長い間色々の事を教へられて居るけれども、それでも佐渡已前の法門は本當のものではないといふことを自ら仰しやつて居る。「三澤鈔」といふ御遺文に、「又法門のことは、佐渡の國に流されし已前の法

門は唯だ佛の爾前の經と思召せ」

と書かれて居る、爾前の經といふのは、法華經より前に説かれた方便の經を爾前の經と申すのである。その方便の經と同じやうに、佐渡の國に流されるまでに日蓮が弟子信者に話した事柄は、方便が混つて居る、眞實の教ではないといふことである、それは御題目も唱へられて居れば、南無妙法蓮華經の本尊も書いて居られる、佐渡へ流されるまでといふのは、建長五年四月二十八日に始めて題目を唱へられて宗旨を建立せられたその日から、文永八年の十月二十八日佐渡へ流される時までを計算するといふこともやうど十九ヶ年の長き歳月が佐渡已前といふことに屬するのである。日蓮聖人一代の布教は三十年弱である、三十二歳より六十一歳に至る迄であるから足掛け三十年といふけれども満二十九年、その二十九年の中に、宗旨を開かれてから佐渡まで十九ヶ年が即ち佐渡已前である、残るところが十ヶ年である。

る。日蓮聖人の御遺文と言つて澤山あるけれども、この三十年間の澤山の御遺文中、十九ヶ年間に書かれた御文章は、佛の爾前の經と思へど自ら言はれて居る。

何故にそれは爾前の經であつて眞實を現はさないかといへば、その意味を詳しく語られて居る。

「此の國の國主我と代をもたもつべくば、眞言師等にも召し合せ給はんすらん、爾の時まことの大事をば申すべし、弟子等にも内々申すならば披露して彼等知りなんす、さらばよも合はじと思ひて各々にも申さざりしなり。而るに文永八年九月十二日の夜、龍の口にて頭を刎ねられんとせし時より、後ふびんなり、我につきたりし者共にまことのことを言はざりけると思ひて、佐渡の國より弟子共に内々申す法門あり。」

即ち眞言宗の人達と公場對決といふことを望まれて居つた、それで一番大切なことを話したならば、

弟子達がそれを振廻して、眞言の坊さんが聞込んで「これはとても敵はぬ」といふことになつて公場對決に出て來ないであらう。今は日蓮が一番大切に思つて居ることを隠して居るから「日蓮は偉さうに言つた所が天台の流を酌んで居る者じや、傳教の弟子智證大師、慈覺大師も眞言に降伏した位のことである、ナーニ日蓮ぐらゐ大したことはあるまい」といふ勢で公場對決に出て來た時に、今まで天台、傳教も言はざりし日蓮已證の大事を明して、一擧にして眞言の者共を粉碎してやらうと考へて居つたが爲に、眞實のことを言はなかつたのである。然るに文永八年九月十二日の夜龍の口に引出されて頭を刎ねられやうとした、その時から後に考へた、あの時自分の首が飛んで居れば、眞言の坊さんと公場對決して、一擧に彼を打破つて佛敎の統一を圖らうといふ希望はあつたけれども、自分が死んでしまつたならば、日蓮に附いて居つた者に眞實の事を言はないで

終るのであつた、この儘死んで居つたならば、日蓮を頼りにした弟子、信者に眞實を明きなかつた點に於て、如何にも不憫なことである。心残りの事である。又佐渡の國へ來ても、生きて歸るつもりではあるけれども、佐渡は雪降り積つて非常に寒い、若しも此處に於て凍へて死ぬとか、又日蓮を狙ふ者があつて暗殺をされるのかして、自分では鎌倉に歸つて公場對決の大事を果さうと思つて居つても、佐渡の土になつてしまへば、眞實を言はずに終つて、洵に弟子達に氣の毒であるから、公場對決のこともあるけれども、それはそれとして、内々弟子達に眞實のことを言うて置かなければならぬ、万一日蓮が死んだならば、眞實を言はずに終るのだからといふので佐渡の國より弟子共に内々申す法門ありといふことになつた。

「此は佛より後迦葉、阿難、龍樹、天親、天台、傳教、義眞等の大論師大人師は知てしかも御心

の中に秘させ給ひ、口より外には出し給はず、その故は佛制して云く、我が滅後末法に入らずば此の大法言ふべからずとありし故なり。」

その先師未だ言はざりし所の眞言を言はう、それは何であるか、眞言との公場對決に於て一大事を言はうとした、その問題といふのは、眞言と法華との關係である。眞言に於ては大日如來といふものを尊崇して、さうして釋尊よりも大日如來が尙ほ尊い佛であるといふことを盛んに言つて居る、それに對して日蓮聖人は壽量品の釋尊を顯本してさうではない大日などといふのは名あつて實なき佛である、釋迦如來はこの世に出られた有限の佛のやうだけれども内面は久遠絶對の本佛で在らせられるといふこと、即ち佛身觀上に於て壽量品の顯本の一大事を明かにすることを仰しやつたのである。即ち「開目鈔」にそれが現はれて居る、いま「三澤鈔」に佐渡の國より内々申す法門ありといふのは、即ち「開目鈔」

べき所で、あとは附たりの話である。

この壽量品の本佛の絶對を以て、眞言は勿論、各宗の者を寄せ集めた公場對決の場に於て、天台、傳教も未だ言はざりし壽量顯本の一大事を以て彼等を一撃の下に粉粹してやらう、初めからこれを言ふたならば彼等は怖氣が付いて出て来まいから、知らぬ顔をして居るといふので、十九ヶ年の間やつて居られたのである。であるからそれより前に題目を唱へたとか、南無妙法蓮華經を書いたといふやうなことが、日蓮聖人の一番偉いことではない、題目も有難いことであるけれども、それが一番究極ではない、この絶對本佛の尊さを顯はすことが日蓮聖人の使命である。

南無妙法蓮華經を唱へることは善いことだけれども、唯ださういふ形式上の言葉で、南無陀彌陀佛の代りに南無妙法蓮華經と言つたといふだけではない、この壽量品の本佛の尊さを顯はすことは、本

のことである。日蓮聖人佐渡の國に渡るや、文永八年の十一月から「返る年の二月雪中に記して有縁の弟子に送る」といふ文永九年の二月「開目鈔」が出来上るまで四ヶ月の間、嚴冬の極寒の裡に、塚原三味堂の一間四面の辻堂の内に凍る筆を呼吸に解いてそれこそ心血を注いで書かれたのが「開目鈔」上下二卷である。

その「開目鈔」は最初の書き出しから「それ一切衆生の尊敬すべきもの三あり、所謂主師親これなり」と筆を起して、絶對的主師親の人格者を明かにしなければならぬといふことになつて、壽量品の顯本に於て本佛を明かにし「壽量品なくんば天に日月なく、人に魂なきが如し……この壽量品の佛の天月しばらく影を大小の器に浮べたまふ」と言つて、本佛のことを明かにせられた。これ等のことは、苟も日蓮主義を奉ずる者が一遍聞いたら忘れやうとしても忘れられるものではない、そこが本常の感激す

當に宗教の信解、學解といふものが秀でなければ出来ないことである。それが爲に日蓮聖人は比叡山に學び、處々方々に學問を積んで、さうしてこの義を明かにせられた。「開目鈔」を読んで見たならば、お題目の有難いといふことを表面から言ふのは唯だ簡單な言分である、それに對して説明することは何もない、宗教の一番大切なことは本佛顯本の點にあるのであるから、そこで「三澤鈔」には續いて

「此の法門出現せば、正法像法に論師人師の申せし法門は皆日出で、後の星の光、巧匠の後に拙きを知るなるべし」

と言はれた。壽量顯本の本佛が顯はれたならば、お日様が出て星の光が隠れるやうなものである。又巧匠といふ巧みな大工が立派な建築したならば、田舎の小さな掘立小屋みたいなものは、あゝ粗末なものだといふことが知れるやうに、日蓮出で、この壽量顯本の法門を明かにする以上は、今までの諸宗

の説く所は問題にならぬのであると言はれた。『日出後の星の光、巧匠の後に拙きを知るなるべし』斯ういふことは日蓮聖人を崇拜する者の忘れられない事である。それはお前の家も立派なものであらうけれども、田舎大工が拵へたものに過ぎない、自分の信する日蓮主義はそれとは違ふ、恰も二重橋の内にある皇居のやうな大建築をされたやうなもので、その御殿を見て来てからは、お前の家が立派だと言つても逆も比べ物にはならぬといふやうに、日蓮教學上から得たる信解はそこになければならない。今のドンドコ法華みたやうなものであつたならば、そんな種類の宗教は世界中どこにでもある、あれ以上のものが澤山ある。日出で、後の星の光と日蓮聖人自ら言つた、その顯本の信解を得て来なければならぬ。これを得終つては最早や富士山の頂上に登つたやうなもので、これ以上高きものはないのである。

日蓮聖人はその事を繰返してどこ迄も明かに御説

し今度又他に動搖でも来すといふことがあつたならば、どうか遠慮なく相談して貰ひたい、恐らくは私の教學に依つて興へた信解は他の宗教思想に依つて動かされない積りで居る。君のやうな人が私の著書に感激して呉れたことは私に取つても非常に喜ばしい、併しそれが再び裏ふといふことになれば心細く思ふから、その時分には黙つて他所へ行かぬやうに自分はこの點に就て斯う思ふがといふことを知らして呉れるやうにといふ返事をやりました。定めし本人も喜んでその書面を讀んだであらうと思ふ。これは今の手紙の中にある通りに『日蓮聖人の感激』といふ書物を或る人から借りて讀んだ、それで非常に感じて、十年以上も基督教の熱心な信者であり、先輩である者が、それを抛つてこの信仰に來たといふことは、確にこの人は純潔な求道者として尊き人格者であると思ふ。そこで絶て批評をすることにはなるけれども、この人の手紙に因んで、この人

きになつて居る。それが爲に壽量品を稱讃して、『開目鈔』には、

「一切經の中にこの壽量品ましまさずば、天に日月なく、國に大王なく、山河に珠なく、人に魂なからんが如し。」

「壽量品を知らざる諸宗の學者は畜生に同じ、不知恩の者なり」

と言はれ、又

「諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ、遠くは法華經の壽量品を知らず、水中の月に實の月の想をなし、或は入つて取らんと思ひ、或は繩をつけてつなぎとめんとす。天台の云く、天月を識らずして但だ池月を観ると。」

と書かれた、これが難かしいといふことはない。この間も或る所で話をした所が、鬚を生した男が、「どうも法華はサウ難かしいから困る、やはり淨土門のやうに、何でもよい南無陀彌陀佛と言ひさへす

の思想が斯様に變遷したことは尤もであるといふ意味を明かにして置きたい。

第一にこの人は眞宗の家に生れて、自分の先祖からの信仰であるから、それを研究して、満足が出来ぬものならばそれで行きたいと考へた。所がだんだん調べて見ると、どうも現在實際の生活をして行く上に力のない宗教であるといふことを考へた、宗教が死んでからだけの未來觀のものならばそれで宜いけれども、自分の求める宗教は現在生活の上から力を得て、死んでから尙ほ悟らうといふ、この世と後の世と貫いて行く宗教でなければならぬと思ふ。その上から研究を進めて行くと、總ての誰がこの世の事はどうでも宜いではないかといふやうな筆法で出て来るから、實際の生活に力のない宗教である。これでは我要求を満たすものではないといふので、その淨土眞宗の信仰に入ることが出来なかつた。その思想は何處からそんな考へが出て來るかといふと

佛陀觀と罪惡觀の上に缺點があるのかと思ふた、斯ういふことを書いて居る。

この人はどの程度まで諒解したのか知らんけれども、私はこの點は共鳴するので、眞宗で説く所の阿彌陀様の誓願といふものが、現在の生活の事を殆んど言うて居らない、人間が死んだら救ふてやるといふやうな話になつて居る。「迎ひの舟は持つて来て居る、生きて居る間はマアどうにかやつて置け、その代り死んだらチャンと迎ひの舟が来て居る、宜い加減な所で早く来い〜」といふやうな、未來觀的になつて居る。さうして阿彌陀様は西の方の世界にござるといふことも、日沒觀とお經にある、日暮になつてお陽様が西の海に隠れる時分に、西の方を向いてそこに瞑想する、入相の鐘がボンと鳴つて來るといふやうな、洵に淋しいやうな氣がする。念佛の聲は震え聲で洵に陰氣な響きがある、ナンマイダ〜と如何にも滅入るやうな感じがする。それが佛

教だといふ風に考へられ易い、洵にあゝいふ悲哀な消極的の日暮れの感じのやうなことはいけなない。日蓮聖人は旭日に向つて題目を唱へたといふが、實に宗教は旭の光の如く、さうして終日赫々として人生を照さなければならぬものである。その點が彼等の佛陀觀に於て、どうも未來の救済といふことが主になつて居る。

それから罪惡觀の方に於て、阿彌陀様の誓願といふことを強く説くが爲に、人間の罪は構はぬといふことを言ひ過ぎる、この世でどんな罪惡があつても構はぬ、寧ろ罪がある方が宜しいとまで言ふのである。悪い事をして居ない者は左程に死を恐れない、散々悪い事をして、もう青鬼が足を引張つて居るといふやうな者は「ア、これは堪らない、どうか阿彌陀様頼みます」といふ風になる。寧ろ悪い事をして居る方が熱心に阿彌陀様お願ひしますといふことになる、善人はそんなに怖がらないから彌陀に頼る力

が弱い、寧ろ罪ある者の方が救はれる、惡人は救はれるけれども善人は救はれないかも知れん、斯ういふやうな筆法になつて來て居る。それでは現在生活を辿つて行く上に於て、宗教が世の中を毒することになるのである。その宗旨を弘めるには都合が好からう、「ナーにこの世の罪などは少しも恐しいことはない」……斯うなるから安心して悪いことが出来る。そこで實際世の中に害毒が流れて來るから、淨土門一流の信念は良いやうに見えて、割に佛敎の感化が世の中を善くし得なかつたのである。

その點に就て、即ち佛陀觀と罪惡觀の上に缺點があつて、實生活に光なき宗教となるのではなからうかと思つて、その信仰に入り得なかつたと言つて居る、この人の觀察は、やはり違つて居ないと思ふ。それから今度は禪學の方に志して行つて見た、所がこれは漠然として濟世の念何處にありやを疑ふと云ふことを言つて居る。禪宗はチョット聞くと非

常に高いやうなことを言ふけれども、宗教はやはり世を濟はなければならぬ。人の死んだ前途とか、絶對の證悟とかいふこともあるけれども、宗教の大きな目的はやはり人生の救済といふことになくはならない。然るに禪宗は世の中を呪ふといふか、世の中を馬鹿にするやうなことを言ふ、世の中の是非は共に非なりといふ言葉を盛んに使ふ、善いも悪いもそんなことはどちらでも宜い、善惡共に不二であるとか、どうでも宜いといふやうなことを盛んに言ふ。人間の世の中は善いとか悪いとか言つても多寡が知れて居るではないか、だから人生の出來事などに心を捉はれないやうに、隣で釣鐘を撞いても、火事の半鐘がチャン／＼鳴つても驚かぬのは無論のこと、そんなものは耳に入らぬやうになつてしまはなければいかぬ。チャンチャン半鐘が鳴つても一つも耳に響かぬやうになる、「こんな半鐘が鳴るのになたには聞えませんか」と言はれる、そんな言葉さ

へ耳に入らぬやうになるのが一番よいのだといふ。それで隻手の聲を聞くといつて、釣鐘の音は聞えないやうになつて隻手の聲を聞く、兩方の手を叩けばボン／＼と誰にも聞える、隻手の聲を聞かなければ駄目じやといふやうなことを言つて、高きに似て濟世の實がない。

これは儒教の朱子學派などからも言はれて居る通りで、佛教が果してさういふものであるならば、空言世に施すなしといつて、非常にうまい理窟のやうであるけれども、それは空理空論にして世の中に適せないものである。これは古來定論のあることで、王陽明も親しく禪學をやつた人だけれども、三十年も禪學をやつた結果これを捨て、居る。日本で徳川の最初に儒教が獨立して來る、その時でも、伊藤仁齋、山崎闇斎などといふ人は、皆一旦寺に入つて居つた禪坊主であつたけれども、どうもさういふ善惡共に非なりとか、善いも悪いもそんなことは構はぬ

といふやうな事ばかり言ふので愛想を盡かして出てしまつた。子供が可愛いとか可愛くないとかいふのは駄目だ、そんな者は焼殺してしまへと言つて、魚を焼くやうに生きて居る子供を鉄弓に乗せて火をつけて焼殺してしまつて、「これで清々した、モウ思ひ残すことはない」と言つて坊主になつた、そんな人間が大きな寺の住職になつたりして居る。日蓮聖人の當時に於ても、さういふ奇矯な言動を爲す者がなか／＼勢力を得て居つた。

そこで此人が、さういふことでは濟世の念何處にありや疑はしいと言つたのは、やはり空言世に施すなしといふ古來の批評と相一致して居るので、私も此點は同感である。高きに似て少し調子が狂つて居る、宗教としてあゝいふ逆觀的のことは宜しくない、逆觀といふのは、人を救ふと言はないで殺してやるといふ、さうして「殺してやるのが本當に救ふことぢや」といふやうな妙な廻りくどいことをい

ふのである、藥を飲ませると言はないで毒を飲ましてやらうといふ、藥などは利かない、毒ならば利くといふ、どうもその言ふことが二重にも三重にも入組んで居る。甚だしきに至つては、釋迦は大馬鹿者だ、自分が釋迦と一緒に生れたならば叩き殺して犬に喰はすのであつたけれども、時代が違つたから彼は助かつたのぢやといふやうなことを平氣で言ふ、だからこれをよい具合に聞取るにしても骨が折れる。さうして佛とは何ぞやと言へば、それは庭前の柏の木ちやと言ふ、そんなことを聴かされて、本當に了解もしないで解つたやうな顔をして居る、所謂野狐禪と稱して間違つた者が一ぱい居るのである。

だから禪宗に檀家もあり信者もあるけれども、どんな信仰を持つて居るかといへば何も無い。そこで道了權現だとか、秋葉山の天狗だとか、理だとか言つて騒いで居るのである。もつと高きに失せず低きに流れず、中正不偏の佛陀の本旨を堂々と説かねば

ならぬものである。低きに流れれば阿彌陀様に行つたり鬼子母神に行つたり、高きに就けば上ばかり見下下を見ない、ポカンと口を開けて居るやうな、どうも調子が外れ過ぎて居る。だから禪學は漠然として濟世の念を疑ふといふこの人の觀察は、その當を得て居ると私は思ふ。

それから禪宗を去つて次に國柱會の方に入つたと云うて居る。國柱會のことに就ては實は私は批評をしたくはないけれども、併しこの人が手紙に言うて來て居る事であるし、餘りに何も言はぬといふのも諸君に對して不忠實であり、又國柱會に對しても敬意を失することであるから、少しばかりこれに就て言うて置くが、これも私はこの人の書いて居ることが當る譯だと思ふ。即ち國柱會に於て信行員となつて二三年もやつて見たけれども、どうもハッキリ判らぬ、それは本尊のことに就ても、日常の行持倫理的方面に就いてもどうも判らぬ、それで何とな

く温か味がなかつたといふことを書いて居る。これは私は多く批評をしないが、本尊の事に就ても、本佛觀がやはり人格的の絶対本佛といふことをハッキリしない點にあると思ふ。唯だ本佛と言つても一切のものが集つて、それ全體が本佛ぢや、何もかも皆寄せてお曼荼羅に書いてある、その一切が本佛であると言つて、人格的な完全な中心の一つがハッキリしない、所謂宇宙神的思想のやうな本佛に流れて居ると、有難いといふことも、温かいといふことも出て来ない譯である。この點は私が命に換へてこれを開明し發揚することに努力して居る所で、私の暇んだ所に依れば、日蓮聖人が身命を賭して戦はれたのは、前に申した「開目鈔」に現はれて居る顯本佛の大事であると考へて居る。題目を唱へるといふことは結構なことだけれども、それは一緒に附隨して出て來ることである、日蓮聖人は唯だ南無妙法蓮華經と唱へることを弘めたといふのではない

本佛を光顯したのである。その點をもつと鮮明にせられないと、國柱會の主張に於ても一番大切な宗教の生命が缺けるといふことは、私は蔭ながら憂いて居ることである。

どうか統一團の團員諸君も、唯だ一般的の考へばかりではいかぬ、その點を十分に打込んで置きたいと考へて苦心して居るのであるが、この頃本尊の問題に就て、時友仙治郎君なり妹尾義郎君なりが、清水龍山師といふ日蓮教學の専門家と往復論難されたことが「若人」誌に連載されて居る、それを見ると時友君でも妹尾君でもナカ／＼よく諒解して居ることが分る。あゝいふことを書かぬうちはそれ程に解つて居ると私は思はなかつたけれども、書いた物を見るとナカ／＼よく解つて居る、だから黙つて居る人も皆よく解つて居るのだと私は思つて居る。正直にあれだけ書いたのは私は感心して居るのであるが、坊さんは何も書かぬ、在家の者でもあれだ

け書くのだから、坊さんはモットよく解つて居なければならぬ、まア偉い者が澤山あるのだと思つて慰めて居る譯である。

斯ういふ大切な事柄はよく注意して聽かなければいけない。普通の事は書物を読んで書いてあるし人に聞けば直ぐに解るけれども、物の心髓生命といふものは、恰も日蓮聖人の「眞の大事を言はざりけりと思ひて、佐渡の國より内々申す法門あり」といふやうなその心髓大事といふものは、サウ屢々言ふものではないから、それこそ本氣で聽取つて、頭腦の中によく打込んで諒解して、死すとも忘れずといふ程に考へて置かなければならぬ。同じ講演をして居る中にも、この事の爲には私が命を賭けてかゝつて居ると言ふ場合がある、この本尊の問題のときには、いつでも私はさう言うて居る、どうしても釋尊に就ての絶対の尊さを信解して行くことでなければならぬ。

それが國柱會に於て未だ透明を欲といふ點に於てこの人が不満を感じた。日常の行持のことに就ては私は知らぬから、倫理的の方面に就ては一言も批評をしないが、唯だ本尊に就て温か味が缺けた感じを持つたといふことは無理からぬことで、唯この人一人ばかりではない。田中智學氏が生存中に於てはその人の活動なり、色々の力に依つて國柱會が團結の勢力を維持されて居るけれども、落着いて信解を練るといふことになつたならば、今申す點をモウ一段と明かなさる必要があらうと思ふ。どうか一日も早く、人に知れない内に、此點を鮮明になさることを祈つて已まない者である。

次に基督教のことであるが、これはこの人が一たび基督教に感心した點は尤もである、基督教は世界的に宣傳せられて居る相當立派な宗教である、その内容根柢は淺薄であるけれども、宗教の有つべき大切な事柄はナカ／＼よく鍛練されて居るから、眞宗

禪學、國柱會等に満足せずして、基督教に至つて漸く満足をして十數年を経て来たといふことは、この人は決して偽りの人ではないと思ふ。下手な佛教よりは基督教の方がその點に於ては勝つて居ると思ふ。

所が左様に努力しつゝ十數年、多くの人を基督教の信者に導いたやうな此人が、私の『日蓮聖人の感激』といふ書物を読んで一遍に動いて居る。その本を人が読んで見なさいと言つて貸して呉れた、それを讀んで見た所が、

『田中智學先生のそれとはかはり、本佛についての考へ方がまるつきり變つてゐるのに驚き、それからそれへと日蓮主義の尊い事、徹底して居ることが分つて参りまして、その結果キリスト教の信仰は根柢よりくすれて信ぜられなくなつてしまひました。』

と述べて居る。私は斯ういふ風になるやうに、こ

從來永らく骨を折つて教學を闡明して來て居るのは同じやうに見えてもそこに價値が全然違つて居るのである。まだそれだけに考へて呉れない坊さんが多いのであるけれども、併し何も坊さんが考へて呉れないからと言つて慨くこともないが、どつちかと言へば呑氣な者が多いものだと思ふのである。私共の苦心はナカ／＼一通りならぬ事なのであつて、國柱會の信仰にも満足せず、基督教の信仰にも満足せず遂に『日蓮聖人の感激』一冊に依つてこの人が動搖を受けたといふことは、眞に私には痛快の感じを持つのである。

何故それでは基督教の信者が私の書物を見て動かといふと、それは大體哲學上の基礎に於て、基督教の信仰といふものが根柢から壞れるのである。即ち基督教に於て謂ふ所の神様といふものは、論理の上から成り立たないものであつて、唯だ神様があつたといふことをお伽話のやうに言ふのみである。

の人ばかりではない、世界的に基督教の信者が日蓮教の精髓に觸れては信仰の根柢が覆へされるやうにと念願して、奮闘を續けて居る者である。この人が斯様な代表的の言葉で、『日蓮聖人の感激』といふ一冊の書物で、十數年間の基督教の熱心なる傳道者が信仰を改めたといふことは、私の豫ね／＼願つて居ることを證明するものであつて、非常に愉快に感ずるのである。

眞宗や淨土宗の信仰に對しても、唯だこれを念佛無間といつて外側から攻撃するだけではいかぬ、信仰の内容に入つて優劣を比較せなければならぬ。お經の外から阿彌陀經は權經ぢや、法華經は實經ぢやこつちはドンドコやつて居つても、如何なる低級な信仰であつても構はないといふやうな、外看板で喧嘩するやうな行き方は何の價値もないのである。實際に法華經に依つて與へられた信解がそれだけの價値をもつといふことでなければならぬから、私共が

その神様が世界を造り、人間を造るなどといふことは非論理なことである、あるべからざることであるからそれはどうしても壞れる譯なのである。さうして彼等の言ふ神、即ち唯一神教といふものは、他に働いて現はれることが出来ないものであつて唯一つであるさうして而もそれは相がないのである、神様といふけれども、形なくして在さざる所なしといふのであるから、ちやうど瓦斯みたいなものである。いつも私は言ふのであるが、あなた方も本當にその事を考へたならば、あゝいふものでは満足が出来るものではない、トテモ有難いといふ感じは起り得ないのである。光の方ならば幾らか満足が出来るけれどもそれでもサーチライトの光を見て頭を下げるといふ者はない、お日様になると動いて居るものだから、何だか生きて居るやうな気分がして頭を下げる。生命といふものがなかつたならば、お日様でもあれは唯一つの物質であると考へたならば、有難いといふ

考は起つては来ない。電燈の光でも、暗い所に電燈をつけてやるといふ人の厚意は有難いと思ふけれども、たゞ自然について居る電燈、精神の無いものに對しては、人間といふものは感激をするものではない。その代りに電柱で頭を打つたといふても腹を立てる譯にはいかぬ、柱を見て「コラ、貴様怪しからんぢやないか」と言ふことは言へない。それが柱の向ふに人が隠れて居つて、その柱をキユツと押しこつちの頭を打つたといふことになれば、その向ふの押した奴が憎いから「貴様ッ出て来い」……といふことになる譯である。精神なきものは、害を與へても得を與へても、何も嬉しくもなければ憎むこともない、自然の危害なるものに對しては怒りを起さないものである。

だから宗教がさういふ機械的な、光とか瓦斯體のやうなものであつてはならぬ、どうしても精神的のものでなければならぬ。さうして又精神的に認めん

来るものではない。それは非常に別れるのが辛いといふことも、この人は人情があるから言うて居るけれども、併し嘉祥大師が弟子を捨て、天台の方に降つたやうに考へて、踏台になつても私はいよと思ふといふことを書いて居る。又善知識が全梵行だといふことも、その書物の中にさういふ言葉が引用してあつて深く感じたのでせう。だから一旦あなたに對して近寄つた以上は、臨目も振らずにあなたを教へ受けたいといふことを書いて居るのである。

基督教は人格の方面が缺けて居るし、働いて出る方に於てもどうも、相がないといふやうなことであるから、宗教情操を満足せしむることが出来ない。

汎神主義に於ても缺けて居るし、統一神主義に於ても缺けて居る。汎神主義でないから自分が天國に行つても神になることが出来ない、神の在ます傍に行つて光榮を受けるだけであつて、何になるのか分らぬ、神にはなれない、神は唯一人だけである、天國

とするのには、どうしても人間の感情といふものは人格がなくてはならぬ。いくら精神的と言つても、形なくして在さざる所なしといふ、スツツといふ音みたいなものでは駄目である。どうしても人間の情意といふものは、やはり美の相を具備したものを要求するものである。それ故に私は屢々その事を壽量品の佛様に就て説いて居るのである。相も完全にあつて、さうして實在の意義を有つて居る、眞善美の結晶の佛であるといふことを言つて居る。「日蓮聖人の感激」の中にも一番初めには、本佛に對する日蓮聖人の感激といふことが書いてある、それを見てこの人は驚いたのであらうと思ふ。それからそれへと讀んで行くうちに彼は涙を流して驚いたのである。さもなければ十數年基督教を信じて、自分の親も妻子も、多くの信者を導いて教會の中心として働いて居つた人間が、忽然とその信仰を捨て、教會へブツツリと顔も出さぬやうになるといふことが出

に行つた所が何をするのか、神の傍に行つてお給仕をするか、庭掃除でもするといふだけの話である。

であるから基督教では上帝の僕といつて居る、僕といふのは下男である、女の方でいへはおさん、ごんである、天國のおさん、ごんになるのであつて、天國の神様にはなれない。さういふ思想は到底東洋人の満足し得る所ではない。佛教の方に於ては一切衆生、悉く佛に成るのだと教へて居る、淨土へ行つておさん、ごんをする譯ではない、本佛と同じやうに絶對のさとりをとお與へ下さる譯ナンであるから、色々さういふ點に於て基督教の思想が足らぬことを考へる。

天國といつてもその天國は具體的には説けないのである、私の友人にもだん／＼基督教の人が居るがさういふ點は哲學の側に於ても、宗教情操の側に於ても頗る不備である。天國の相はどんなものぢやといつてもわからぬ、唯だ天國は結構だ／＼と言ふ、

「それは言ひ盡せないだらうけれども、どんなものだかチヨット言うて見て呉れ」イヤちつとも判らぬ兎に角結構だ」……それではどうも不完全ではないかと私はよく言ふのである。天國々々といつた所で、神が既に相がないのだから、天國に行くといふ人間も相のない所の、形なくして在さざる所なしといふ互斯みたやうなものになるのか。そんな形の無いものならば、別におさん、ごんも要らなければ下男も要らぬ譯ではないか、どうも天國に入るといふやうな言葉は、具體的に、具象的に、天國といふものは斯ういふ相のもので、そこに行く者は斯ういふ相を以て御機嫌宜しう……となつて來なければ、唯だ天國に入るといふ言葉のみでは駄目だと思ふがどうぢや、斯う言ふと基督教の傳道者は弱つて居る。負け惜みの強い奴は「ナ―にそんな事ぐらゐ」といふやうな顔をして居るが、これはモウ議論に負けた者が體裁を作る時には、必ず感ぜないやうな風をした

がるものである。けれども仲のよい者であるといふヤ君、それを言はれては困る」といつて、正直に吾々の友人の基督教を研鑽した人は告白して居る。要するに基督教は理智を満足せしめることが出来ない、哲學的根柢が欲けて居る。同時に宗教の情操をも満足せしむることが出来ない、形なくして在さざる所なしといふやうなものは、宗教の情操を満足せしむることは出来ない。旁々さういふことを私が「日蓮聖人の感激」の中に述べて置いた所が、この人は多年實際にやつて居ることで、深く思ひ當つたと見える。私は決して想像を以て宜い加減の事を言ふのではない、本當にやつた人ならば胸に響くことを言うて居るから、この人は多年本當にやつて居つたので、一遍に驚いて、基督教の神様よりも、日蓮主義で教へる本佛は、哲學の上に於ても、宗教の上に於ても完全なものである、日出でて後の星の光であるとして、基督教の神を捨てたといふことは、

實に痛快な事であると思ふ。

斯ういふ人が多くなつて行つてこそ法華經が廣宣流布するのである、ドンドコ圓扇太鼓を叩いて、歐羅巴人や亞米利加人が南無妙法蓮華經を唱へて、御會式の晩みたやうに世界中の人が練り歩くやうに思つて居つたならば大間違である。永き間の歴史感情といふものは、彼等は偶像といふものを捨て、居つたのであるから、鬼子母神だの帝釋だの、そんなものを持つて行つたり、或は又文字を拜むといつても東洋人が有難がつて居るやうな斯ういふ漢字といふものに依つて、決して彼等は満足するものではない。どうしても實在の本佛を考へ、さうしてそれに對する宗教意識を持つて行かなければ、世界の宗教を感服させることは出来ない。東洋人に對して曼荼羅をお示しになつたことは結構であるけれども、この漢字に依つて御示しになつたのが一番をらいのではない。世界を支配するに足る絶對無上の本佛を壽量

品の經意に依つて示されて、世界最高の宗教を建設せられて居る點に於て、日蓮聖人が偉いのである。宗教に伴ふ寫象式的曼荼羅とか、題目を唱へる言葉とかを以て、日蓮聖人の功勳の第一であると思つて居るのは、日蓮門下での頭腦がまだ發達して居ないといふ私に言ふのである。それは題目も有難い、お經も有難い、何でも有難いと言へば有難いに違ひない、日蓮聖人の仰しやることも有難い。併し何處か日蓮聖人が命を捨て、聞はれた一番大切な所かといふと、それは絶對の本佛を光顯し給うた點なのである、それでなければ基督教の信仰を降伏せしめることは出来ない。基督教の信者が頭腦の中から、成る程の方が上だと感心するやうなものを持つて行かん限りには、世界に法華經が弘まる氣遣はない。これは餘程大切な點である本當に法華の坊さんが偉ければ、今私の言ひ居るこの事を問題にして、十分に研究して置かなければ

ならぬ。姉崎博士なども前年「どうも曼茶羅が有難い」と言ふけれども、これで闊浮提廣宣流布は難かしい」と言つて色々心配して居られた。又村上専精氏も日蓮教學を調べて「日蓮聖人の曼茶羅が非常に良いと言ふけれども、斯ういふ點を考へなければならぬではないか」と言つたことがある。或は内村鑑三氏も、日蓮聖人の法華經崇拜の思想に就ては餘程注意しなければならぬといふことを論じて居るのである。是等の宗教界の識者が日蓮教學に對して論じたやうな事柄を、十分に注意して置かなければならぬ。それを「イヤそんな事は學問に因はれて居る」とか「日蓮聖人が本化の菩薩であるといふことを知らぬのぢや」と言つて、唯だ壓迫のことを言つて居る、そんなことで思想といふものは弘まつて行くものではない。内輪の有難いと思つて頭を下げて居る者ばかり集めて居る席ならばそれとも宜いけれども、それを以て世界の思想界を降伏せしめることは

出来ない。そんなことは三十年も昔に言ふならば、耳を傾ける者もあるかも知れんけれども、吾々が書生の時分でも、そんな愚論は吾輩は論破して、何を寝呆けたことを言ふかと思つて居つたのに、吾輩がモウ年を老つて死にかけた時分に、今頃まだそんなことを言つたり、又今の若い者が却つてさういふ考に執はれて居るのを見ると、實に可笑なことであると思ふ。

要するにそれ等の人の識見が狭いといふものである、考が低いのである。本當に法華經の宣傳を擔うて起たうといふやうな抱負信念なく、口先でいゝ加減なことを言つて居る。落着いて將來法華經を擁護し、日蓮聖人の法勳をして何處までも花を咲かせやうとするには、如何に進み行くべきかといふことを熱心に忠實に考へたならば、どうしても私主張するやうな意味合になつて來なければならぬと信するるのである。

どうかこの人の手紙の意味に就ては皆さんもよく御考へになつて、唯だ一冊の書物を読んだ人がこれだけの感激を持つとするならば、あなた方は少くとも直接私の教化の下に、度々話を聴いて居るのであるから、ハッキリ「日出でて後の星の光」といふことを意識して、つまらない他の者が言ふ事ぐらゐに動かされないだけの信仰を持つて、益々信念を磨いて行かれることを希望する次第である。(丁)

人の手なければ寶の山に至ると雖も、終に所得なきが如く、信の手なき者は三寶に逢ふと雖も所得なし。(心地觀經)

立正活映公募の

聖傳映畫脚本

審査結果發表

立正活映株式會社が宗寶として永遠に貽すべく拾萬の巨金を投じて日蓮聖人御正傳映畫を謹作すべく去年四月壹千圓の筆墨料を懸けて其の撮影脚本の募集を公表し十月末の締切日まで集つたものを十一月早々から本年三月中旬までかゝつて慎重な審査を遂げた結果文篇としてはその殆んど總てが上々のものばかりなれど撮影脚本としては久坂春助神保邦一安藤乾幽大多和とい飯野與作等諸氏のものを選外佳作として發表された外そのまゝ用ひられる理想的のものはないかつたと

東京統一園本部教報

△三月三日(第一日曜)午後一時開會、法要の後本多現下の「福音五大部」の綜合觀(其三)あり、聴衆八十餘名△同日(第二日曜)午後一時開會、法要の後「福音五大部」の綜合觀(其四)△本多現下の二時間に亘る講演あり聴衆の百名△同日午後一時開會地明會例會、法要の後本多會長現下の「阿含經」に於ける訓誡と題する法話あり、終つて例に依り茶話會を開く、雨天なりしも來會者八十餘名 △四月七日(第一日曜)釋尊降誕花まつり大會、午後十二時開會、先づ初めに日暮里小供會、市川立正小供會、永住町妙經寺小供會等聯合開會、童謡、踊あり、童話、鎌田先生「挨拶」榎木先生「雨が降つたけれど」もそれでも會場は當てた統一園階下の講堂は殆んど満員の盛況司會者山口先生の指揮のもとに小供花まつり大會のプログラムは順序よく進められて同二時階上の大人の方に移る、先づ法讀法要(東京寺院參列)次で本多現下の「南」釋迦牟尼佛「題下」に約二時間の御講演あり、來聴者約四百、當日は龍本として本多現下者の「釋尊降誕の大因縁」四百部、供物(紅白淨めの菓子)四百、甘茶の接待をした、因にこの準備委員には男子制幹事と女子制幹事等が前日より花佛堂、會場裝飾等に盡力された、主催は

聯合で、統一園、信道會、地明會、顯本宗學會、本郡正道會、淺草行道會、市川立正會、大森妙道會、品川正法護持會、大日本妙道會、洗足立正會等、△四月十四日(第二日曜)午後一時開會、從來中止されてゐた第二日曜復活會であつた丈に講師自身は非常な能力のある意氣込で廣告にも全力を盡した、花觀時の日曜で面からも快時の爲めに聴衆僅かに數十名であつたが満堂悉く熱誠の靈氣漲つてゐた。「日蓮聖人の主義」榎木顯正「利慾の巻に立ちて」田中道爾「我が發露」福部清事「妙法青年の新誓願」高矢昂「佛祖の遺風を奉じて」小西日喜「所感」本多日生現下等、終つて同志十二名の決死的宣誓紀念提唱、次で佛前に終生文化運動精進の宣誓式法要勸修、大に法要會、本多現下の挨拶、顧問、矢野茂閣下の挨拶あり、同志を代表して小西師の挨拶、夜八時散會した、△四月廿日午後一時開會、地明會例會、法要の後本多會長現下の「日蓮聖人の悲願」と題する法話あり終つて茶話會午後五時散會す、△同日廿一日(第三日曜)午後一時開會、當日は風雨猛烈なりしも聴衆約百餘名、法要の後本多現下の理教の關係から遍滿、合著、中心と分派されて御講演あり、△四月廿八日(第四日曜)午後一時開會、當日は聖祖開宗紀念日に相當するので「日蓮聖人開宗紀念大講演會」を開演することにした、「現代思潮の諸相」商學士中村清一「明治天皇の御製を拜して」知法恩國會理事伊東竹三郎「獅

大阪教報

○三月八日蓮成寺にて「立正安國論講義」上田師○二十日豊婦人會「所願滿足」本多現下○同日午後五時より大森俱樂部にて本多現下天至拜受祝賀會開催現下の天至拜受を心から悦ぶ善男女馳せ参するも二百有餘上田師和井田氏木ノ宮氏の祝辭本多現下の挨拶ありて和井田氏の發聲にて萬歳を三唱し喝采湧くが如く大満悦の裡に會を開じ直に講演會に移り「法華部の諸經に就て」本多現下、今回は講演三日前より熱田、清原の諸氏發起の下に宣傳隊を組織して千日前、道頓堀、心齋橋等に出席廣告配布と辻教法にて宣傳せし爲か會場は立錫の地なき迄の盛會なりき○二十一日蓮成寺にて「正しき信心」上田師○二十四日堂園寺にて「決定不動の信心」京藤師、何れも盛會多大の効果を見たり、京藤師教師弘教日記、○三月十六日福井妙經寺にて日宗各派合同の日蓮聖人降誕會を修す書「逆境に處するの覺悟」夜「現代の社會相と日蓮主義」○十八日神戸立正寺にて「法説の生活」○十九日豊島本願寺にて「逆境の覺悟」夜妙經寺にて「思想國難と日蓮聖人」○二十日豊本

願寺にて「心の寶第一なり」夜妙經寺にて「思想國難と日蓮聖人」(其二)○二十一日午前本願寺にて「聖仰の徳と力」午後妙經寺にて「思想國難と日蓮聖人」(其三)○同夜泉市立正會館にて「開會の辭」山岡師「正しき信仰」島田師「正しく生くべき道」紀野布教師「現在の理想と日蓮主義」京藤布教師○二十二日和氣本成寺にて「現代思潮と日蓮主義」至る處頗る盛會多大の効果を奏せり。

名古屋布教誌

三月五日夜 開日抄講義教化會館 原田日勇
同 八日夜 本尊掛懸人會 同
同 十三日晝 幸福なる生活豊田本社女工 原田日勇
同 十九日晝 彼岸散敷靈山寺にて 同
同 二十日晝 彼岸散敷常樂寺にて 同
同 廿一日晝 彼岸散敷妙行寺にて 清水一乘
同 廿二日晝 東洋紡織夜濶定店本多日生現下 同
同 廿三日 服部工場日本車輪社 原田日勇
同 廿三日夜 法華部要義教化會館本多日生現下
次いで本多現下恩賜杯祝賀會を舉行會する者約五百名、先づ檯上の白木三寶に天杯を飾り莊嚴を極む、やがて原田日勇師の奉祝の旨を述べ、遂て自慶會代表服部紡織工場長越川親志氏、行學會統一園支部代表として名古屋銀行員大八木義雄氏婦人會代表石上千代子の祝辭後現下の答辭あり終つて天皇陛下萬歲三唱、現下萬歲一唱大盛會裡に散會、有志一同は更に階上にて茶菓快談

中國教報

三月一日 同信會冬は必ず春と成る中山賢勇
同 三日 依伯北村聯合青年團發會式後、社會生活の并同善に就て 及本導觀
個人理想と社會理想に就ての宗教的考察 (顯本) 中山賢勇
同 五日 同村敬老會後、古きを採れて新らしきを知れ 同
同 七日 同信會聖力より聖熱え 美なるが故に尊からず 同
同 十二日 岡直村女子青年會後、美なるが故に尊からず 同
同 十五日 婦人會、我等如何に善處すべきか 同
同 廿一日 舊釋尊涅槃會後、活殺の審判者としての佛陀 中山賢勇
同 廿四日 佐伯軍人會式後、飯の宗教化同前
廿七八日 草生稻時法要後、生の淨化としての日蓮主義 同
四月一日 佐伯小學校、友會並父兄大會後感情教育に就て 校長
社會生活と思想の調整に就て 中山賢勇
同 四日 各宗聯合招魂祭典後、中山賢勇
典祭の實義に就て 同
同 六日 開山忌法要後、心は同じ堀川の水

金澤教報

○信仰講義三月八日御長本光寺にて衆生教化の方法本郡常次郎氏○涅槃會三月十四日本化傳道園にて一切經に顯れたる佛陀本郡常次郎氏○常樂會三月十五日日本化傳道園にて一切經に顯れたる佛陀本郡常次郎氏○常樂會三月十五日日本化傳道園にて一切經に顯れたる佛陀本郡常次郎氏○常樂會三月十五日日本化傳道園にて一切經に顯れたる佛陀本郡常次郎氏○常樂會三月十五日日本化傳道園にて一切經に顯れたる佛陀本郡常次郎氏

宇都宮安國會の社會教化大講演

同會は大正三年東京天晴會と相聲して設立せられ爾來十有六年以て今日に及び其の間業に教育の名士を招聘して思想指導の教化事業に盡せしめりしが清同會多年の宿願として期許せる大盛會本多現下の御出講を得、三月廿八日午後六時半より市の中央なる縣公會堂に於て教化大講演會を開催す、濠洲幹事會會の宣言市學務課長上野吉氏、國民精神の大方針の題下約三時間に亘つて熱烈なる妙辯を振られ満堂立錫の餘地なき聴衆に其深の感動を與へられたりやがて司會者の發聲に和し拍手喝采、法悅津々たる大盛況裡に散會す時十時を觀ず當夜の聴衆には師團、官廳、學校各團體の人士多數を占め當地の思想界に對し多大の感奮を與へたり。

社寺建築 及臺灣檜材の安價提供
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不
充分なる檜材は干割狂ひ等の缺陷多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地
(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社寺工務所
(電話青山六〇二八番)

神奈川縣鶴見町

社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原

社寺工務所福岡支所
(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社寺工務所大阪支所
(電話西三三二四番)

- 臺灣檜材六特資
- 一、耐久防腐
 - 二、蟻害絶無
 - 三、香氣清楚
 - 四、木質堅緻
 - 五、理整然木
 - 六、木高稚包

目次

所感.....	本多日生
祖書五大部の綜合觀.....	本多日生
記事.....	
○知法思國會大會	○清明會講演會
○小松川開堂供養	
各地教報.....	

第三十四年六月號



昭和四年四月廿四日印刷納本
昭和四年五月一日發行 (第四百十號)

不許複製

編輯兼發行人 小林順義
印刷人 鈴木日雄
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地
電話高輪六〇二四番

發行所 統一發行所
編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地
電話高輪五一〇七一番

統一統			
一ヶ年	半ヶ年	一ヶ月	四分
金貳圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金九拾錢	金五拾錢
送料共	送料共	送料共	送料共
前金之	前金之	前金之	前金之

統一統			
一ヶ年	半ヶ年	一ヶ月	四分
金貳圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金九拾錢	金五拾錢
送料共	送料共	送料共	送料共
前金之	前金之	前金之	前金之